

安来市埋蔵文化財調査報告書第30集

# 岩屋遺跡

柳地区住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月

安来市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、安来市教育委員会が調査を実施した安来市柳地区住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

岩屋遺跡　（安来市柳地区住宅団地造成事業・安来市荒島町）

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　安来市教育委員会

事務局　市川博史（教育長）・成相二郎（文化振興課長）

廣江奈智雄→武上　巧（文化係長）・金山尚志（文化係主事）

調査指導　徳岡隆夫（鳥根大学理工学部教授）

田中義昭（鳥根大学法文学部教授）

中村唯史（鳥根大学理工学部大学院）

調査員　水口晶郎・大塚　充

遺物整理　安達裕子・泉あかね・中山和美

4. 現地調査及び遺物整理については、上記の調査指導の諸氏の他、（株）田中建設、鳥根県埋蔵文化財調査センター、門脇等玄（安来市文化財保護委員会）、東森市良（同）、野津弘雄（同）、横山純夫（同）をはじめ関係諸機関に多大なご協力を頂いた。

5. 本調査に伴う遺物・実測図・写真は安来市教育委員会で保管している。

6. 本書の挿図の方位は磁北を示している。

7. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S D（溝状遺構）

8. 本書では自然科学的分析を川崎地質株式会社に依頼し、玉稿を頂いた。

9. 本書の編集・執筆は大塚が水口・金山の協力を得て行った。

## 目 次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第2章 位置と環境 .....	2
第3章 調査の概要 .....	4
第1節 縄文海進について .....	4
第2節 波食台について .....	5
第3節 調査の結果 .....	5
1 遺構 .....	5
2 遺物 .....	10
第4章 まとめ .....	26
付編 安来市岩屋遺跡における微化石分析 .....	28
図版	
報告書抄録	

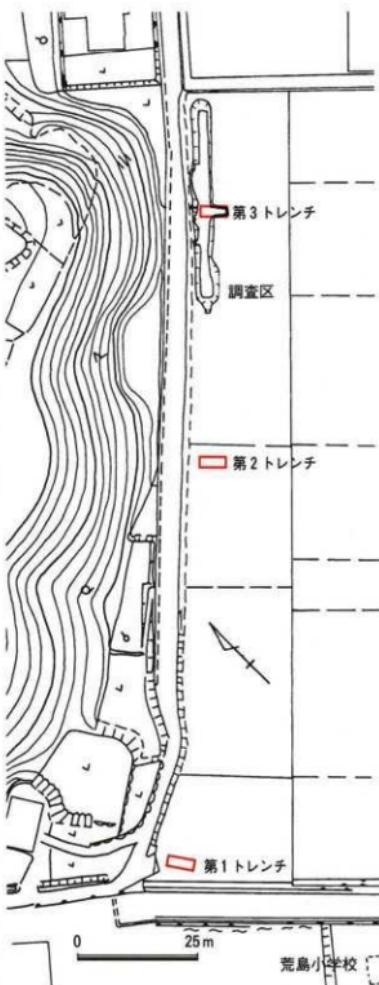
## 挿 図 目 次

第1図 岩屋遺跡調査区配置図 (1:1,000)	
第2図 周辺の遺跡 (1:25,000)	
第3図 波食台のできかた	
第4図 海岸地形の名称	
第5図 岩屋遺跡遺構配置図 (1:200)	
第6図 岩屋遺跡トレンチ実測図 (1:40)	
第7図 岩屋遺跡調査区横断面図 (1:60)	
第8図 岩屋遺跡調査区縦断面図 (1:60)	
第9図 SD01出土遺物実測図 (1) (1:3)	
第10図 タ (2) (1:3)	
第11図 タ (3) (1:3)	
第12図 タ (4) (1:3)	
第13図 タ (5) (1:3)	
第14図 タ (6) (1:3)	
第15図 SD02出土遺物実測図 (1) (1:3)	
第16図 タ (2) (1:3)	
第17図 SD03出土遺物実測図 (1) (1:3)	
第18図 タ (2) (1:3)	
第19図 SD-2出土遺物実測図 (1:3)	
第20図 有機物層出土遺物実測図 (1) (1:3)	
第21図 タ (2) (1:3)	

## 第1章 調査の経緯と経過

平成9年度柳地区住宅団地造成事業に伴い、平成9年4月4日安来市土地開発公社より予定地内の埋蔵文化財についての照会があった。これを受けて、分布調査を実施したところ丘陵に接する場所に遺跡の存在する可能性があり、3ヶ所のトレンチを設定し平成9年9月9日より試掘調査を行った。3ヶ所の内、一番東側の第3トレンチでは、現地表面の約1.5m下に岩盤の層があり、その直上から完形に近い須恵器の壺を発見した。また、岩盤に趨る溝を精査したところ、弥生土器の破片を多く含んでいることが分かった。このことから、散布地であると考えられ、安来市土地開発公社と協議を行った結果、工期が迫っており延期も困難である等の事情から、試掘調査を本調査に切り替え、遺物の発見された第3トレンチを拡張した形で本調査とすることとなった。

第3トレンチの東西、岩盤の続く範囲を調査区とし、岩盤中の溝の精査を行い遺物の採取を行った。溝の中は青灰色の砂層になっており、この砂層中から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が入り交じって検出された。また、岩盤直上の有機物を多く含んだ層からは、ほぼ完形に近いものから小片までの須恵器がまとまって検出された。調査を進める過程で、当初地山層であると思われた岩盤が岩場のようにつながっており、また溝の壁面に丸いくぼみが多くみられ、海岸線の可能性が考えられた。そのため、島根大学徳岡隆夫教授に調査指導を依頼したところ、ここが縄文海進時に形成された海岸線であることが明らかになった。こうしたことから急遽記者発表を行い、さらに、調査期間を延長し、溝部分の拡張や岩盤の続き方を見るためのサブトレンチの設定などを行った。また、この谷の環境変遷・植生変遷を明らかにするため、調査区壁面からサンプルを採取し理化学分析を行った。拡張部の溝からはさらに多くの遺物が出土し、サブトレンチでは岩盤がほぼ平原に遺構背後の丘陵に続いているであろうことが確認できた。途中、秋雨の影響で調査区が水没し池のようになるなどのハプニングもあったが、平成9年10月17日現地での調査を終了した。



第1図 岩屋遺跡調査区配置図 (1:1,000)

## 第2章 位置と環境

岩屋遺跡の所在する安来市荒島町は、周辺に弥生時代後期～古墳時代終末期にかけての墳墓が密集する場所である。東西約2km・南北約2kmの範囲の中に弥生時代の四隅突出型墳丘墓、古墳時代前期の大型方墳、中期・後期に築かれた前方後方墳、石棺式石室を持つ終末期の古墳などが連続と築かれる。同一地域内での首長墓の変遷がたどれる全国的に見ても稀な場所であり、地域性の強い変遷をとげているのも大きな特徴である。こうしたことから、この地域の墳墓を総称して荒島墳墓群という。この荒島墳墓群のはば中央の谷に立地するのが岩屋遺跡である。岩屋遺跡の調査は周辺の墳墓・遺跡の立地や消長を考える上で非常に重要なものになったと思われる。以下、時代ごとに荒島墳墓群を中心とした周辺の遺跡を概観してみる。

**弥生時代後期** 仲仙寺8～10号墓、安養寺1・3号墓、塩津山6・10号墓、宮山4号墓などの四隅突出型墳丘墓が築かれる。特に塩津山6・10号墓は40m級の四隅突出墓としては大型のものである。この墳墓の所在する丘陵西側に広がる斜面には、大規模な集落跡である柳・竹ヶ崎遺跡がある。塩津山6・10号墓と同時期の集落であり、この時代の拠点集落ではないかと考えられている。

**古墳時代前期** 大成古墳、造山1号墳など60m級の大型方墳が造られる。この時期の方墳としては全国最大級で出雲地方の有力な首長のものと思われる。全国各地の首長墓が前方後円墳または前方後方墳であるのに対して、方墳であるという点できわめて特殊である。

**古墳時代中期** 出雲地域東部では、全国的にはほとんど築造されなくなる前方後方墳を中期以降首長墓に採用する。こうした最初の前方後方墳が宮山1号墳である。宮山4号墓と同一丘陵上に立地し全長57mである。清水山1号墳は造山古墳群と谷をはさんで西に立地する一辺42mの二段築成の方墳である。

**古墳時代後期～終末期** 後期になると荒島墳墓群の首長墓よりもはるかに大きい100m級の古墳が出雲地域中部と西部に出現する。これらは西日本でも特に大規模なものである。この時期荒島丘陵では大型の前方後方墳である造山2号墳・仏山古墳が造られる。

その後、出雲地域東部の首長は、横穴式石室の一種で横口式石棺を独自に発展させた石棺式石室を埋葬施設として採用する。塩津神社古墳、若塚古墳、高塚山古墳がそれである。この頃、同時に横穴墓も多く造られる。塩田横穴墓群は凝灰岩に掘り込まれた精緻な横穴墓である。

**奈良時代以降** 中山墳墓からは家形石製骨蔵器が、小久白墳墓からは須恵器製骨蔵器が検出されている。いずれも火葬墓である。

(1) 出雲考古学研究会「荒島墳墓群」「古代出雲を考える」1994

(2) 安来市教育委員会「荒島古墳群発掘調査報告書－大成古墳第4・5次調査－塩津山1号墳墓群・若塚古墳測量調査－」1999

(3) 島根県教育委員会「塩津丘陵遺跡群－一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区段」1998

(4) 渡邊貞幸「出雲の方墳・出雲の前方後方墳」「古代出雲文化展」鳥取県教育委員会1997

(5) 安来市教育委員会「清水山古墳群発掘調査報告書」1994

(6) 渡邊貞幸「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」「山陰考古学の諸問題」1986

(7) 島根県教育委員会「中山遺跡・巻林遺跡」1994



第2図 周辺の遺跡位置図 (1 : 25,000)

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	岩屋遺跡	櫻文海進による波食台	14	高塚山古墳	石棺式石室の一部が露出
2	宮山墳墓群	4号は四隅突出墓 1号は57mの前方後方墳	15	白岩古墳群	3基からなる古墳群
3	安養寺墳墓群	四隅突出墓2基。消滅	16	小島幹古墳	方墳
4	仲仙寺墳墓群	19基からなる墳墓群 8~10号が四隅突出墓	17	石切場上古墳	方墳
5	下山墳墓群	四隅突出墓1基を含む墳墓群	18	遠山古墳群	1号は古墳時代前期60mの方墳
6	山根古墳群	5基からなる古墳群	19	小久白墳墓	弥生墳丘墓1基・土塁墓2基
7	桜松古墳群	石室の一部が露出	20	小久白道跡	奈良時代末の火葬墓 須恵器製の骨蔵器、鉄薙
8	塙津神社古墳	石棺式石室が露出。古墳時代後期	21	若塚古墳	石棺式石室をもつ終末期の古墳
9	塙津山墳墓群	1号は20×25mの方墳 6~10号は四隅突出墓	22	中山墳墓	石製の牽形骨蔵器が出土 奈良~平安時代の火葬墓
10	柳・竹ヶ崎遺跡	弥生時代後期の拠点集落跡	23	客山古墳群	円墳1基、方墳1基
11	柳Ⅱ遺跡	古墳時代中期集落跡	24	塙田横穴墓群	荒鳥石の山を割り抜く
12	仙山古墳	50mの前方後方墳。古墳時代中期	25	坪内横穴墓群	二段墓門。42mの方墳
13	大成古墳	古墳時代前期60mの方墳	26	清水山古墳	古墳時代中期

## 第3章 調査の概要

今回の調査で検出された縄文時代の海岸線は縄文海進時に形成された波食台である。これは、遺跡の立地する荒島周辺だけでなく、中海周辺の古環境を考える上で非常に貴重な発見といえる。ここでは、調査の結果のみでなく縄文海進・波食台の形成について簡単ではあるが触れておきたい。

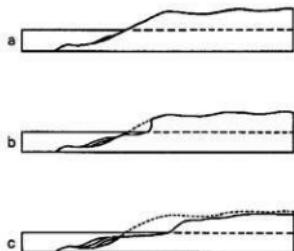
### 第1節 縄文海進について

海水面の上昇や地盤の沈降などによって、海岸線が陸地に入り込んでくる現象のことを海進という。逆に、海水面の下降や地盤の隆起によって、海岸線が陸地から離れていくことを海退と呼ぶ。約1万年前の最終氷期終焉以後、この海進や海退を幾度か繰り返し、現在に至っている。

最終氷期(ウルム氷期)が終わる第4期更新世末(約1万6千年前～2万年前)から地球が徐々に温暖化していく、汎世界的に海水面が上昇する。最終氷期最盛期には現在より、100m以上低かった海面が+2m付近まで急激に上昇し、地球規模で大きな海進が起こったと考えられている。この時期、日本は縄文時代草創期～前期にあたり、この時に起こった大規模な海進を特に縄文海進と呼んでいる。水位がもっとも高かったのは約5000年前、海の面積がもっとも広がったのは約6300年前のアカホヤ火山灰降下時期であり、この頃、年平均気温は現在より約2℃高かったと考えられている。

縄文海進時の水位は一般的に太平洋側では+2m程度であると考えられるが、中海周辺部ではこの高さまで海面が上昇した地形は発見されていない。この地域で縄文海進の痕跡もしくは縄文時代の地形が確認されている遺跡として、東出雲町・鶴賀遺跡<sup>(1)</sup>、島根大学構内遺跡<sup>(2)</sup>がある。鶴賀遺跡では、縄文海進時の海底面であると思われる堆積層が確認されており、+1m付近がこの堆積層形成時の潮位であると見積もられている。島根大学構内遺跡では、堆積層の変遷から縄文期に海水の影響を受けたのは+0.9mまでであると推測されている。また、島根半島に点在する海食洞は+1m付近<sup>(3)</sup>にある。海食洞は、海水面の高さ付近につくられるもので、この高さまで海面が上昇した痕跡であると思われる。このように中海周辺で確認された事例のいずれも海面が+2mにまで達した痕跡ではない。海面高度は海水量の変化に伴って変化するが一方、地盤の昇降運動などの影響も受けることから、地域差も大きい。こうしたことから、この地域ではそこまで海面が上昇していない可能性が高いといえる。

今回発見された岩屋遺跡の旧汀線はおよそ+0.7mの高さに位置しており、波食台という形で検出された。波食台については後述するが、海水面の高さを明確に示すものであり、縄文海進時のある一定長期間ここに海岸線が存在したことを示すものである。このことは中海周辺の古環境の変遷を知る上で貴重な資料を提供している。また、埋没した時期を含め、周辺に展開する荒島墳墓群の成立を考える上でも重要な位置を占めるものであろう。



第3図 波食台のできかた

## 第2節 波食台について

岩屋遺跡で見られる波食台とは、海食(海の浸食)作用によって海平面近くに生じる平らな台状の地形のことである。以下、簡単に波食台の形成される過程を見てみたい。海食は海岸においてもっとも著しく働き、波の作用で露岩の基底部を削る(第4図a〔原形〕)。削られた部分はえぐられていき、やがて上部が崩落して海岸線に急峻な崖ができる。

(第4図b)。この崖のことを「波食崖」という。こうしてできた波食崖も、同じように波の浸食をうけることとなり、後退を続ける。このときに波食崖の前面には平坦な台ができる(第4図c)。この台のことを「波食台」という。波食台が形成されるのは、ざっと以上のような過程によるが、これは言うまでもなくかなりの長期間を要し、また海面がその間一定の高さで安定している場合による。

以上のようなことから、櫛文海進に伴う、岩屋遺跡の波食台の形成時には長期間水位が一定であったことが分かるが、それがどの時期(最も水位が上がった時期なのか、あるいは海進もしくは海退の途中の時期)のものかははっきりしなかった。しかし、波食台は海平面近くに生じるもので、旧汀線を明確に示すものである。つまり、この場所では、少なくとも+0.7mまでの海進が起こったことは間違いない。また、波食台の背後には波食崖があると思われるが(第5図参照)、調査区外であるため検出するには至らなかった。ただし、接している丘陵の状況から波食台は約9m程の規模で平坦面が形成されていると思われる。

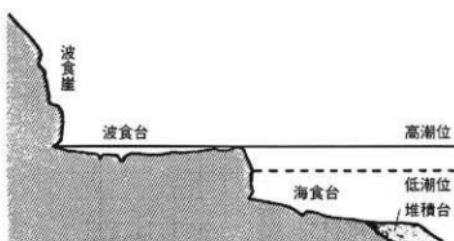
岩屋遺跡の波食台は波食面が滑らかになっている。これは風化のためと思われ、離水してしばらく露出していたことを示しているが、離水した時期ははっきりしない。また、波食台の溝には穿孔貝による丸いくばみが無数にあり+0.5mを境に風化の大きい部分と残りのよい部分に分かれれる。埋没の直前まで、もしくは、離水した後もこの高さまでは、海面がきていたものと思われる。ちなみに、ここでいう離水とは波食面からの離水のことである。波食台中の遺物包含層から出土した土器の時代から、ここが埋没始めた時期は弥生時代後期と考えられ、少なくともこの時期までは波食台の付近に海岸線があったことは確かであろう。

## 第3節 調査の結果

### 1. 遺構

#### 試掘トレンチ(第6図)

事業実施区画の水田の中で最も丘陵よりの部分に3ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施した順に第1～第3トレンチとした。いずれのトレンチも2層ほどの耕作土層が見られ、その下は水田をつくる際に人为的にしかれた疊層が見える。この疊層の下は、それぞれのトレンチで堆積の仕方が

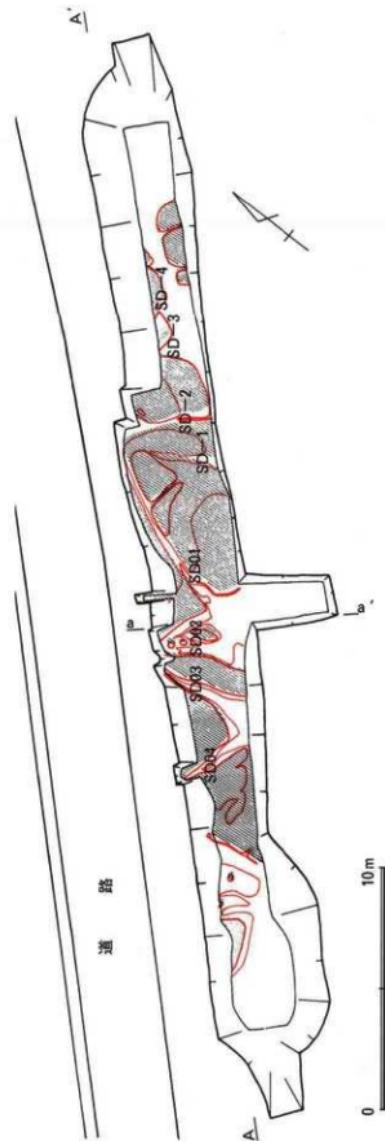


第4図 海岸地形の名称

違うが、黒色に近い層が80cmほど見られる。この層が耕作に伴うものかはっきりしないが、この場所は何度か圃場整備が行われておりその際に形成されたものかもしれない。その下は、有機物を含む層になっており、第3トレンチのこの層からは完形に近い須恵器の長頸壺が出土した。この層に含まれる有機物は、アシなどイネ科の植物の根と思われ、非常に多く含まれていた。第2・第3トレンチではその下が凝灰岩の岩盤層になるが、いずれのトレンチも最下層は砂層になつておらず、第3トレンチではこの砂層が岩盤層の溝状の部分にも入っていた。ここが大量の遺物の包含層になっており、有機物層の遺物とあわせこのトレンチの周辺が散布地であると思われた。

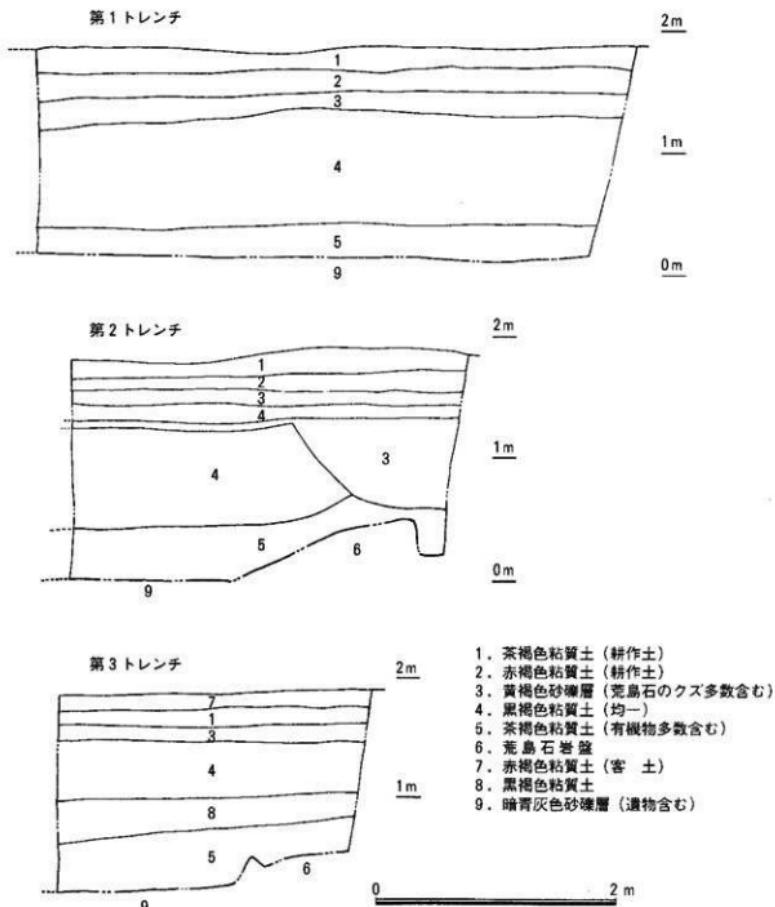
#### 本調査区（第5図・第7図）

遺物が大量に検出された第3トレンチを東西に拡張する形で、長さ約40m・幅約5mの調査区を設定した。当初、散布地と思われたため岩盤層を地山と考え、遺物包含層である有機物層まで重機を用い、その後人力による掘削を行い岩盤を検出した。その結果、岩盤層にはいくつかの溝がはしり、この溝に区切られる形で点々と岩場が続いていることが分かった。一見すると海岸部の岩場のような岩盤はその後の調査指導の結果、縄文海進時の波食台の跡であることが確認された。この岩盤層の表面は滑らかだが、溝の壁面には1~2cmほどの丸いくぼみが多く見られる。穿孔貝によるもので、肩部では摩滅している。これは離水した後、風化したものと考えられ、溝壁面の残りのよい部分は砂に埋まる直前まで水中にあつ



第5図 岩屋遺跡遺構配置図 (1:200)

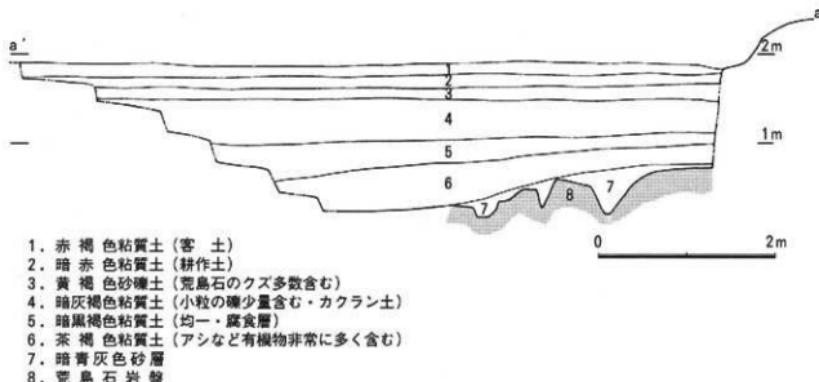
たものと思われる。残りのよい部分の最上部はほぼ0.5mで、溝が埋まり始めた時点での水位はこのあたりであったと思われる。第5図中のアミ掛けの部分が、この時点で海水面上に出ていたと思われる部分である。



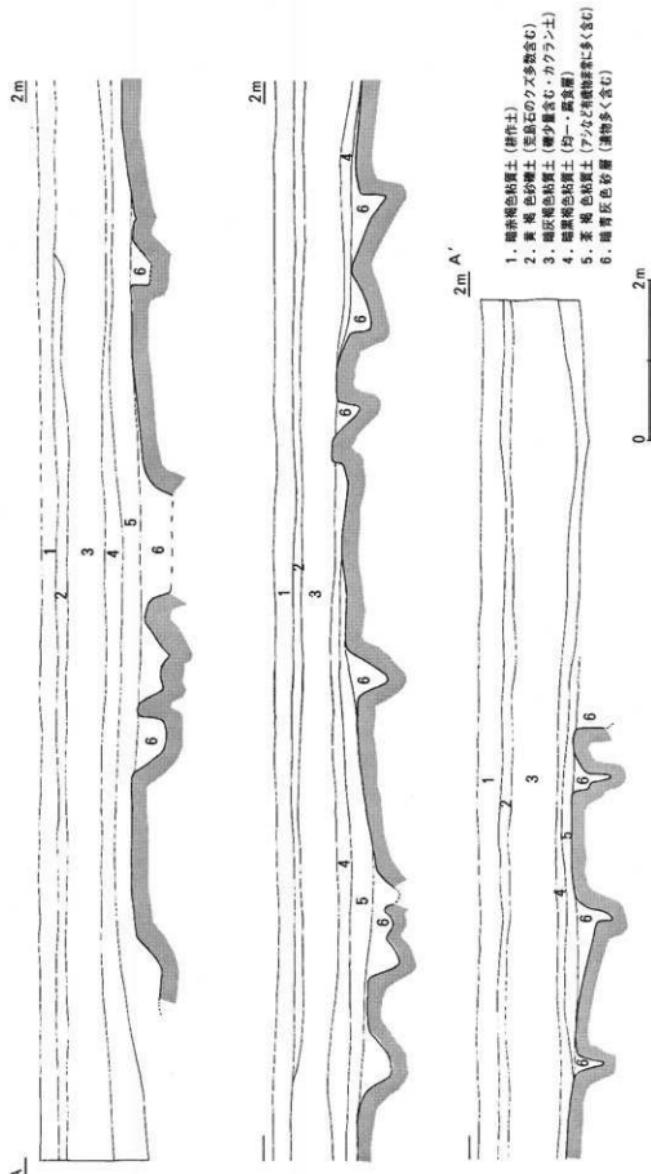
第6図 岩屋遺跡トレンチ断面図 (1:40)

旧波食台であるこの岩盤層にはいくつかの溝があることは前述のとおりだが、その溝を埋める砂層と岩盤の直上の層である暗茶褐色の有機物層が遺物包含層となっている。砂層からは縄文・弥生土器が、有機物層からは須恵器がそれぞれ出土し、このふたつの包含層は時代的に明確に区分することができる。砂層中の遺物は、縄文時代晚期から古墳時代前期にかけてのもので、入り交じって検出された。しかし、そのほとんどは弥生時代後期のもので、それ以前の時代のものは非常に数が少なく再堆積によるものと思われた。非常に多くの遺物は検出されたが、そのほとんどが破片で完形になるものはほとんどなかった。また、布留式土器など外来系の土器と思われるものも何点か出土している。有機物層の遺物は古墳時代後期から律令・奈良期のもので、総数30個体ほどである。これより上の層からは遺物を発見することはできなかった。重機により有機物層の直上まで掘削したということもあるが、耕作土やカクラン層の堆積が見られ、包含層はその他にはないと思われる。また、堆積環境変遷や植生変遷を確認するため第3トレンチの断面から10ヶ所のサンプルを採取した。結果の詳細は巻末花粉分析の項を参照いただきたいが、古墳時代後期にこの場所がアシ原のような低湿地であったことが確認されている。水田耕作が行われたのはそれ以後の時代であると思われ、この谷が耕作され始めたのは比較的新しい時代になってからといえる。

第3トレンチ掘削時に発見した遺物を多く含む溝をSD01とし、これを規準に遺物を含む溝を西側にSD02～04、東側にSD-1～-4とした。いずれも、25～50cmの深さである。SD01とSD02は先端部でつながっており、このふたつの溝の中から最も多く遺物が検出され、全体のはば6割はここからのものである。反対に、SD-1・SD-3～-4の中には少量の遺物しか含まれていなかった。これらの溝は浅く、幅も狭いため遺物が溝に入り込みず、流されたためと思われる。波食台の形成の節理にしたがい背後には波食崖を伴っていると思われるが、岩盤はほぼ平坦に調査区外に続いており、波食崖につながるような立ち上がりは調査区内では確認できなかった。波食崖の痕跡は調査区に接する北側の丘陵内にあるものと思われる。



第7図 岩屋遺跡横断面実測図 (1:60)

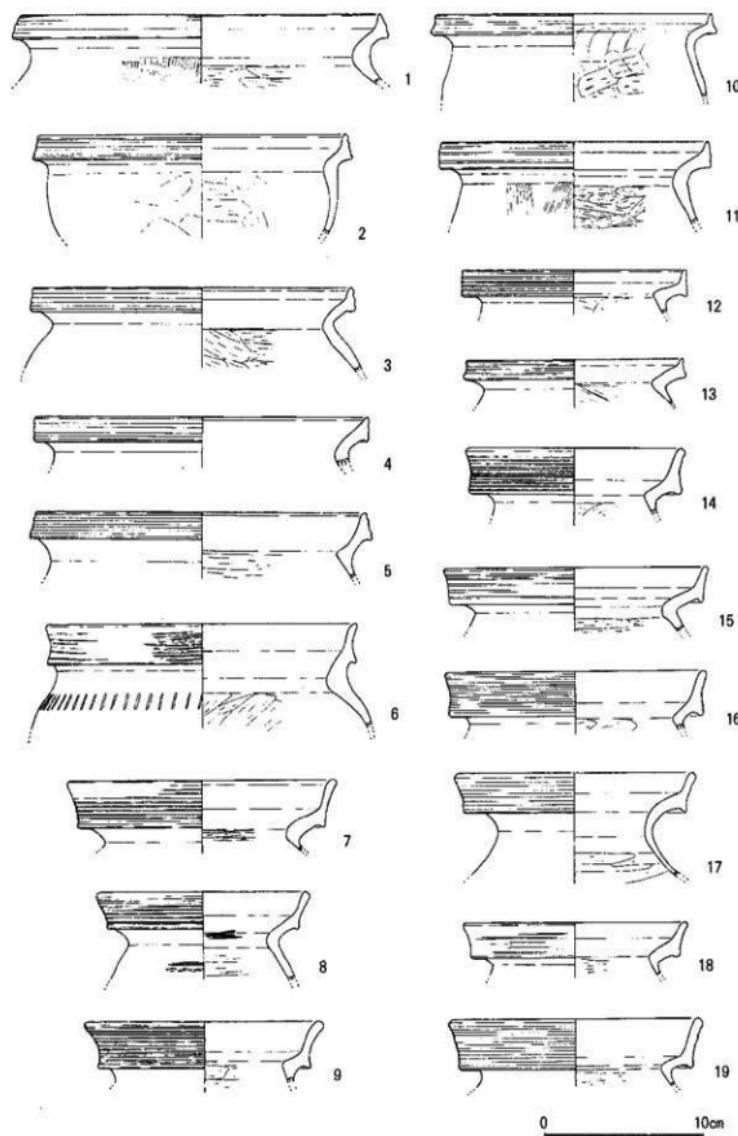


第8図 岩屋遺跡調査区縦断面図（1:60）

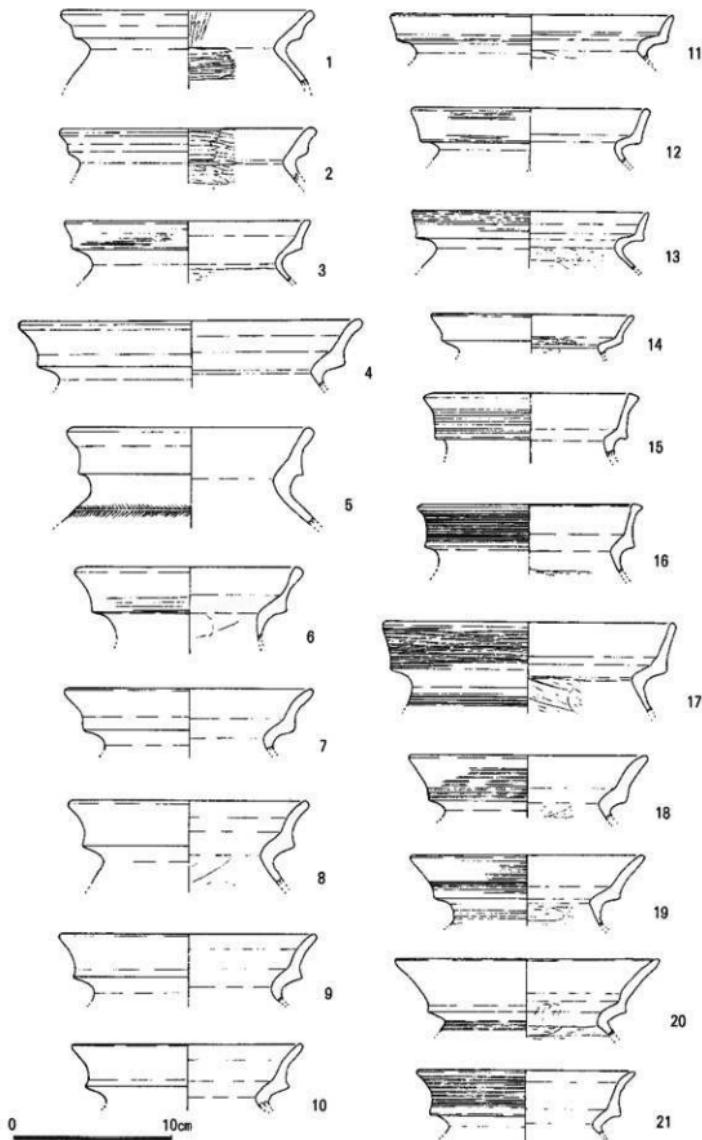
## 2. 遺 物

### S D 0 1 出土遺物 (第 9 ~ 14 図)

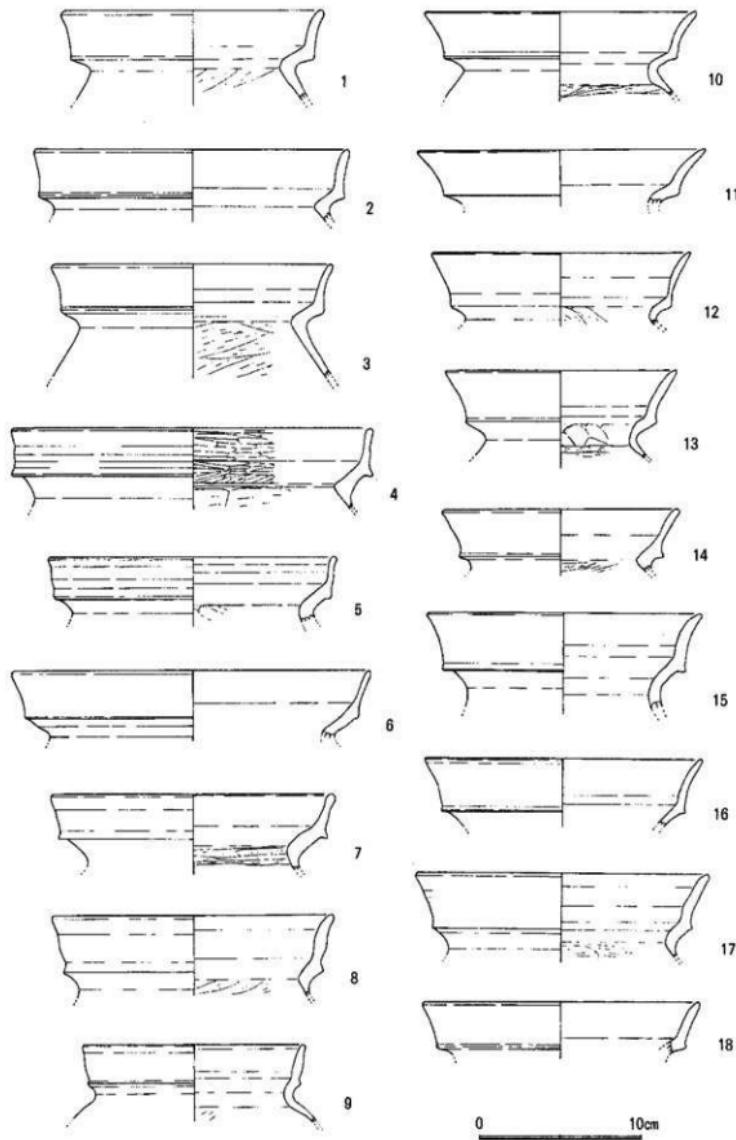
第9図1・3～5・10・11・13は甕で口縁部は上方に短く引き上げられ、外面に2～4条の凹線を施す。1は復元口径22.6cmを測り3～5・10・11は口径16.8～20.8cmである。4以外は口縁部が内傾する。調整は外面はタテハケ、内面は頸部までヘラケズリを施す。草田編年1期と考えられる。2は同時期の鉢で口縁部形態は前述の甕と同じである。復元口径19.4cmを測る。6・15・18は甕で口縁部がやや長く立ち上がり、外面に凹線を数条施している。内面の調整はヘラケズリを施す。このうち6は口縁部の凹線が雑に施され、肩部に貝殻腹縁による列点文が施されている。草田編年2期と考えられる。7～9・16・19は甕で高く伸ばした口縁外面に貝殻腹縁によると考えられるクシ条工具で平行線を施す。内面は横方向にヘラケズリを施す。いずれも草田3期の甕である。17は同時期の壺で、復元口径14.6cmを測る。口縁部の形態・調整等は上述の甕と同じである。第10図1・2・4は甕で口縁部は器壁が厚く短く外反し、外面を強くなっている。4は復元口径21.6cmを測り、1・2は16.0cmである。内面の調整は頸部までヘラミガキを施している。14は形態は上述の甕と同様であるが、器壁は薄くなっている。復元口径は12.8cmを測る。3は甕で口縁部は短く外反し、外面にはかすかに擬凹線文が認められる。口径15.4cmである。11・12は甕で短い口縁部がまっすぐ外反している。13も短い口縁部を持つ甕で、復元口径15.1cmを測る。先端はうすく引きのばし先端が尖り気味となっている。15～19・21は高く伸ばした口縁外面に貝殻腹縁によると考えられるクシ条工具で平行線を施す。いずれも草田2～3期の甕である。内面は頸部までヘラケズリを施す。17は復元口径18.3cm、19は14.8cmを測りいずれも外面肩部にクシ状工具による平行沈線文が施されている。5～10は甕で口縁外面は平行線文は施されないが、そのカーブは貝殻腹縁を押しつけたものに類似する。口径13.7～16.1cmを測り、草田編年4期と考えられる。20は口径16.8cmを測り、草田編年5期の壺である。口縁断面を薄く引きのばし端部は尖り気味となり、口縁部の稜はほぼ水平に突出している。肩部にクシ状工具による平行沈線文を施し、胴部内面はヘラケズリを施す。第11図はすべて草田編年5期の甕である。2・4・5は口縁部の器壁がやや厚く、直立気味に立ち上がる。4は口径22.2cmを測り、口縁部内面の頸部までヘラミガキを施しそれ以下はヘラ削りによって仕上げる。7は復元口径17.1cmを測る。口縁部先端がやや肥厚し、稜は下方に突出する。その他のものは口縁断面を薄く引きのばし端部は尖り気味となり、口縁部の稜はほぼ水平に突出している。第12図1～5・7・8・15・16は草田編年5期の甕で口縁断面を薄く引きのばし端部は尖り気味となり、口縁部の稜はほぼ水平に突出している。1～5・7・8は口径10.3～13.1cmを測り、15・16は16.2～16.5cmを測る。20も同様な形態をもつが、口縁部がやや直立気味に立ち上がる。復元口径は16.5cmである。9～13は甕で口縁断面を薄く引きのばし端部は尖り気味となっているが、口縁部を外方に軽く折り曲げている。13は口径20.5cm、9～11は、14.1～15.0cmを測る。17・18は口縁端部を丸くおさめ、内面端部をなでていることから内面端部を内側にわずかに折り曲げているようにも観察される。いずれも15cm前後の口径である。6は直口壺と考えられ、復元口径9.5cmを測る。内面端部を強くナデすることによってわずかに屈曲している。外面には縱方向にハケが観察される。14は高坏脚部と考えられ、その脚部は比較的高く内面はヘラケズリを施す。第13図1・3～8・14は草田編年5期と考えられる甕である。1は口縁部が直立気味に立ち上がり、復元口径22.6cmを測る。



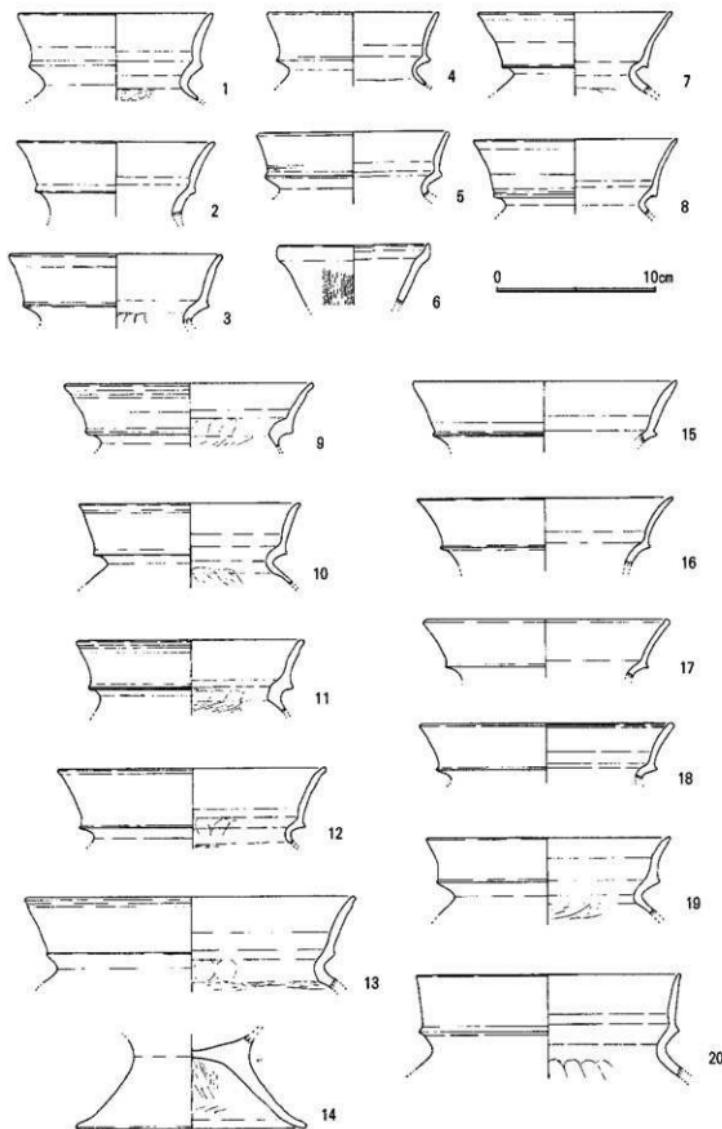
第9図 SD01出土遺物実測図(1)(1:3)



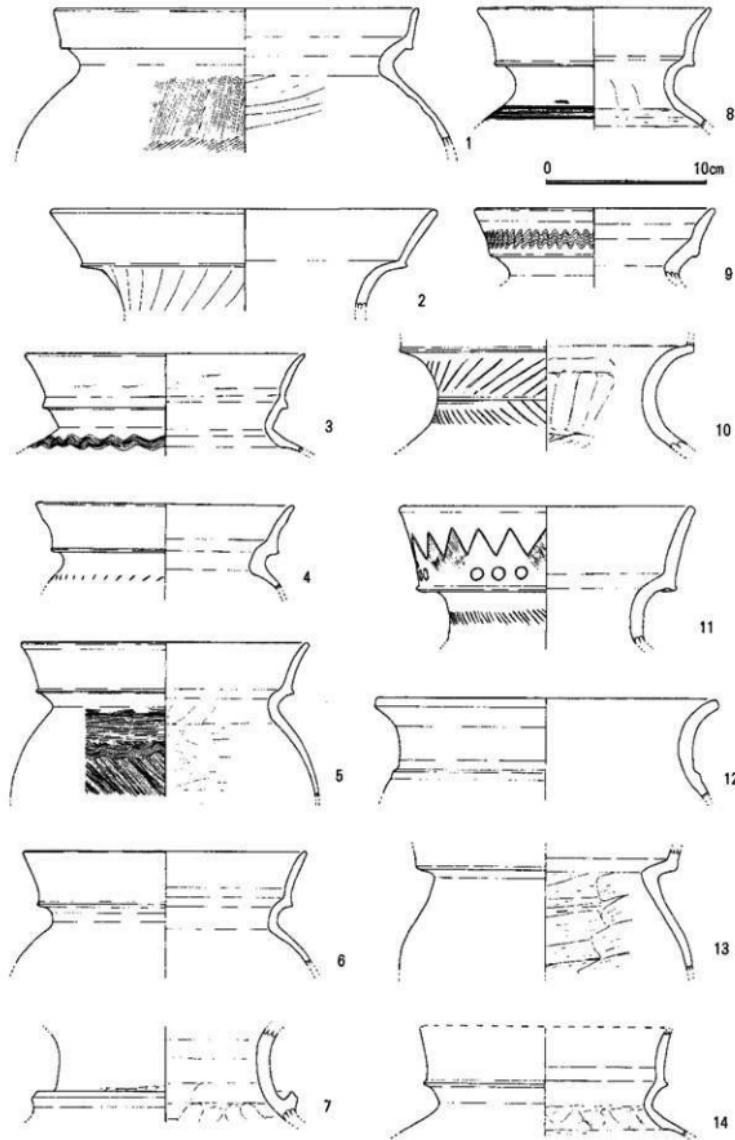
第10図 SD 0 1 出土遺物実測図 (2) (1:3)



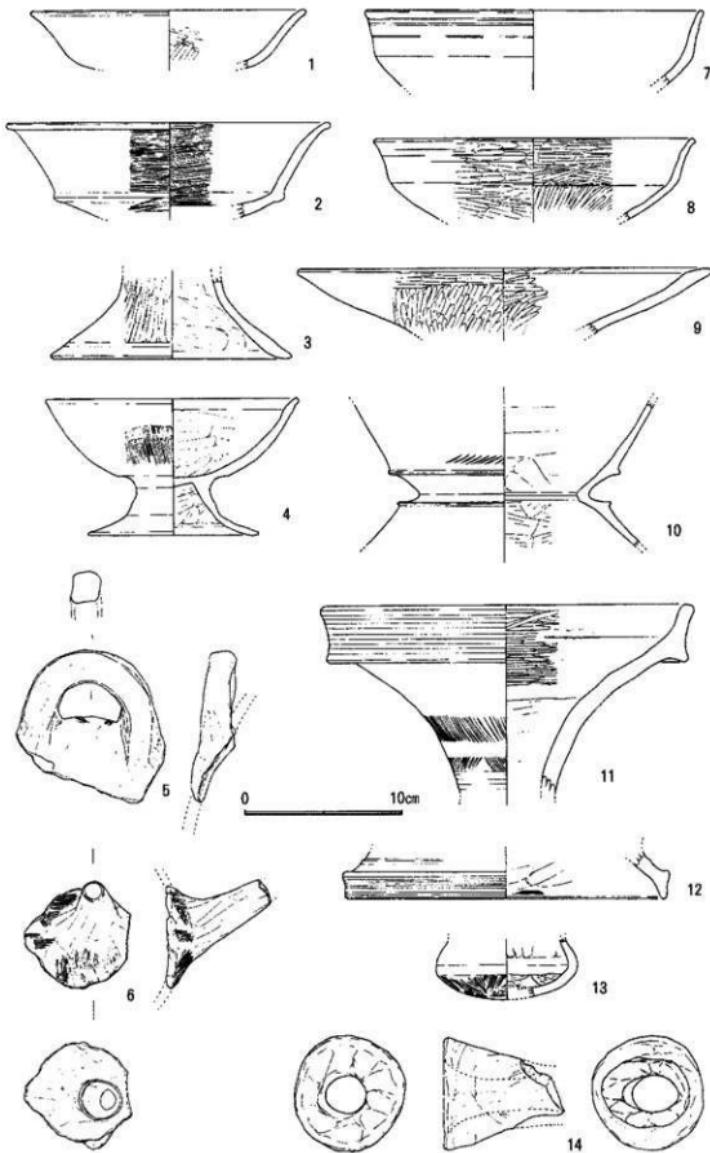
第11図 SD01出土遺物実測図(3)(1:3)



第12図 SD01出土遺物実測図(4)(1:3)



第13図 SD 0 1出土遺物実測図(5)(1:3)



第14図 SD 01出土遺物実測図(6)(1:3)

9は口縁部にクシ状工具によって波状文を施している。クシ状工具によって、3は波状文を、5は波状文と平行沈線文を肩部に施す。いずれも口径18.0cmほどである。2・10・11は草田編年6～7期の壺である。2・10は頸部に羽状文を施す。11は口縁部にヘラ描で雑な鋸歯文？と竹管文のスタンプ、頭部に斜線文を施す。鋸歯文のないところに竹管文を施し、文様の規則性が見える。7は壺の頸部で、その頸部下に突帯が貼られている。12は前期の壺の口縁部で、頸部下に突帯が貼り付けてある。第14図1～4・7・8は弥生時代から古墳時代にかけての高坏である。1・7・8は口縁部と坏部がゆるやかにつながり、2はその境に突帯をついている。4は坏部はやや内湾して立ち上がり口縁端部を外方にわずかに折り曲げている。坏部の1／2ほどが欠損しており、復元口径15.6cm・底径10.5cm・器高8.6cmを測る。脚部は大きく外反し、内面はヘラケズリを施している。9も高坏と思われるが、口縁部が大きく広がる。内外面ともヘラミガキを施す。5・6は注口土器で、5は逆U字形の把手、6は注口部である。10は鼓形器台で筒部が形数化し内面は稜となっている。草田編年7期である。11・12は器台である。11は器台受部で口縁部は数条の擬凹線文が施され、内面はヘラミガキが施され点々と赤色顔料が付着しているのが観察される。口縁部の1／2が残存しており、復元口径22.6cmを測る。12は内面の調整が粗く脚部であると思われる。13は小型の壺である。底部にハケ目状の調整が見られる。14は、外部から熱を受けた痕跡は認められないが、その形状から羽口と考えられる。

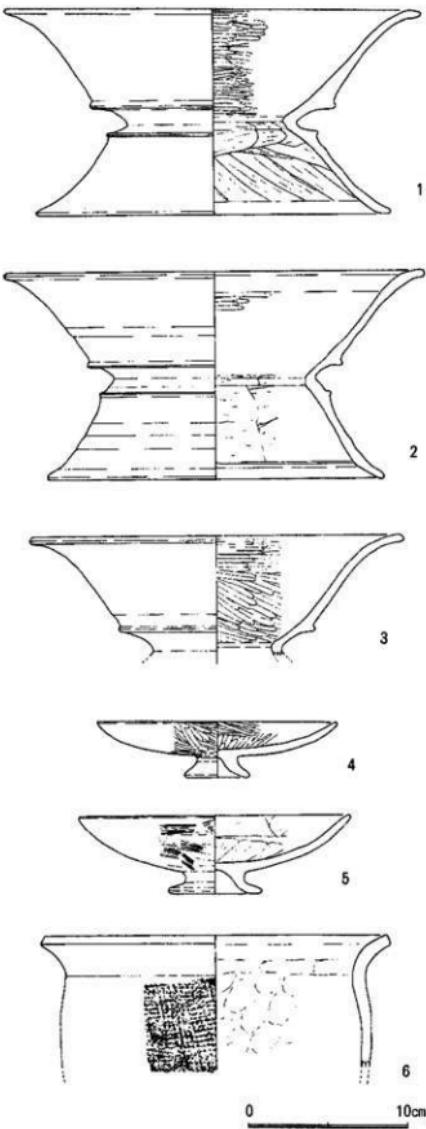
### SD02出土遺物（第15・16図）

第15図1～3は鼓形器台で、いずれも上台・下台間が縮約したもので、その端部を折り曲げている。調整は外面ヨコナデ、内面上台はヘラミガキ、内面下台はヘラケズリを施す。1・2は口径26cm・器高13cmほどではほぼ同じである。底径は21.0～21.8cmを測る。時期は草田編年6～7期と考えられる。4・5は低脚坏でいずれもゆるやかに立ち上がる坏部をもち、4は口径14.8cm・器高3.5cmを測り、5は口径16.8cm・器高4.8cmを測る。調整は4が内外面ヘラミガキ、5が外面ハケを施す。6は漢式系土器の壺で口縁部は体部から屈曲して開き、外面に格子状タタキを施す。第16図1は口縁は短く立ち上がり外面を強くナデている。体部の調整は外面タテハケ、内面は頸部までヘラケズリされており、復元口径21.6cmを測る。当方では類例の少ない形態を持ち外来系の可能性もある。1は、復元口径14.8cmを測る。口縁部はやや短く立ち上がり、外面に4条の凹線を施し、内面は頸部直下までヘラケズリを施す。草田編年1期もしくは2期の壺と考えられる。2は草田2期の壺で4と比べ口縁部がやや長く立ち上がり、外面に凹線を6条施している。12～14は高く伸ばした口縁外面に貝殻腹縁によると考えられるクシ状工具で平行線を施す。いずれも草田3期の壺である。15は複合口縁をもつ壺で口縁部内外面を強いナデで仕上げ、口縁部の稜は斜め下に突出する。草田編年4期に相当すると考えられる。9・10は草田編年5期の壺で口縁断面を薄く引きのぼし端部は尖り気味となり、口縁部の稜はほぼ水平に突出している。3・11もこの時期を前後する壺であろうか。6・16は草田編年6期の壺で、口縁部はやや厚みを増し、端部をわずかに外方に折り曲げている。このうち16口縁外面に波状文を施し、頸部内面下部に指頭圧痕が認められる。図示中の部分約2／3が残存しており、復元口径18.6cmを測る。体部外画上半に縱方向にハケを施した後クシ状工具による平行線文・波状文を施している。7・8もこの時期を前後する壺であろうか。

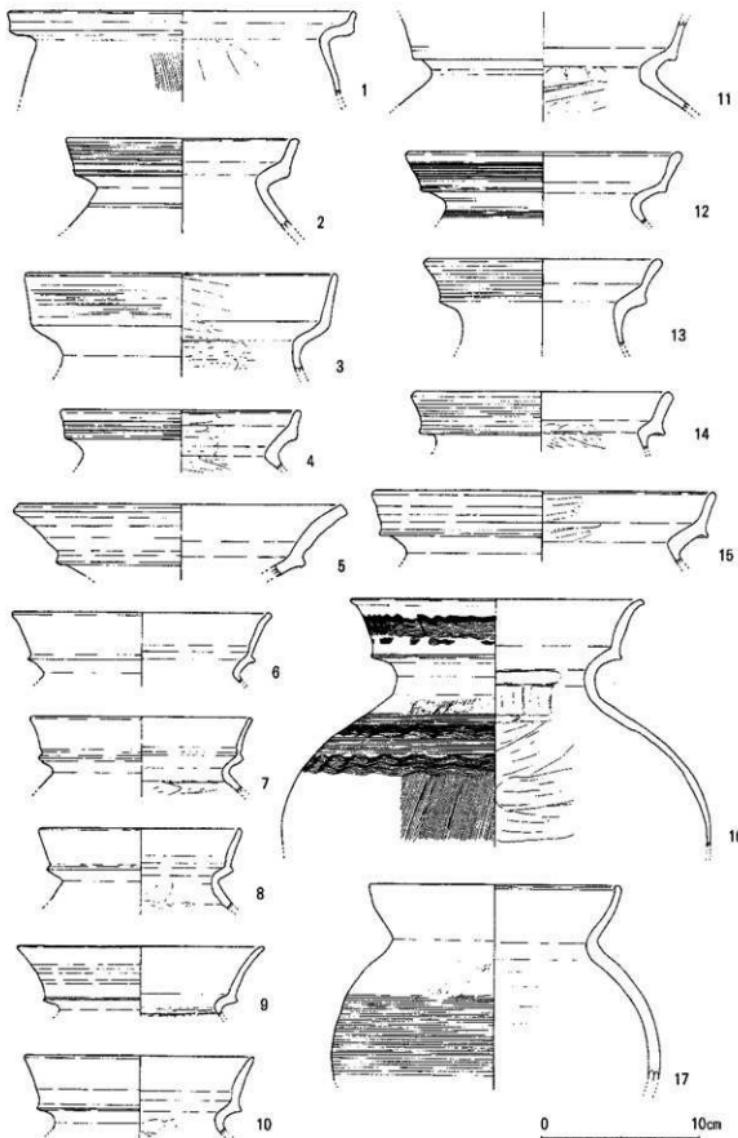
5は複合口縁の壺で高く、かなり開く口縁を持つ。草田編年6～7期と考えられる。17は近畿地方の土器編年の布留式に含まれる単純口縁の壺で、口縁部は内反し口縁端部を内側にわずかに引き上げている。体部は外面が縦方向にハケを施した後クシ状工具による平行線文を、内面は横方向にヘラケズリを施している。

#### S D 0 3 出土遺物 (第17・18図)

第17図1は第16図1と同様、口縁は短く立ち上がり外面を強くナデしている。復元口径は21.8cmを測り、体部の調整は外面タテハケ、内面は頸部までヘラケズリされている。当方では類例の少ない形態を持ち外来系の可能性もある。2は口縁部が上方に短く拡張するタイプの壺で、口縁外面に3条の凹線を施す。復元口径は19.8cmを測り、内面の調整は頸部までヘラケズリを施し、草田編年1期の資料である。4・12は草田編年2期の壺で口縁部がやや長く立ち上がり、その外面にヘラ状工具により擬四線を描く。13は複合口縁をもつ壺で口縁部内外面を強いナデで仕上げ、口縁部の稜は斜め下に突出する。復元口径12.8cmを測り、草田編年4期に相当すると考えられる。18は口縁断面を薄く引きのばし端部は尖り気味となり、口縁部の稜はほぼ水平に突出している。復元口径19.0cmを測り、草田編年4期と考えられる。3・5もこの時期を前後する壺であろうか。13は復元口径14.6cmである。複合口縁をもつ壺で口縁部内外面を強いナデで仕上げ、口縁部の稜は斜め下に突出する。器壁は厚手で草田編年4期に相当すると考えられる。



第15図 S D 0 2 出土遺物実測図 (1) (1:3)



第16図 SD 02出土遺物実測図(2)(1:3)

6～9・14～17は草田編年6～7期の甕で口縁部は厚みをもち、比較的高い口縁端部に平坦面をつくる。10の口縁部は短小で、内湾気味に立ち上がる。復元口径12.8cmを測り、松山編年Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。19は単純口縁をもつ小型の甕で、内面はヘラケズリを施し、復元口径9.7cmである。第18図1～4・6・7は高坏である。1～4は坏部で内面にヘラミガキを施す。6・7は脚部で途中で屈曲し広がる。6は、外面をハケ、内面を水平方向のヘラ削りによって調整する。7は脚部の広がる部分にハケ目が見られる。いずれも弥生時代後期後半と考えられる。5は注口土器の逆U字形の把手で、図中網掛け部分は表面の剥離が見られる。

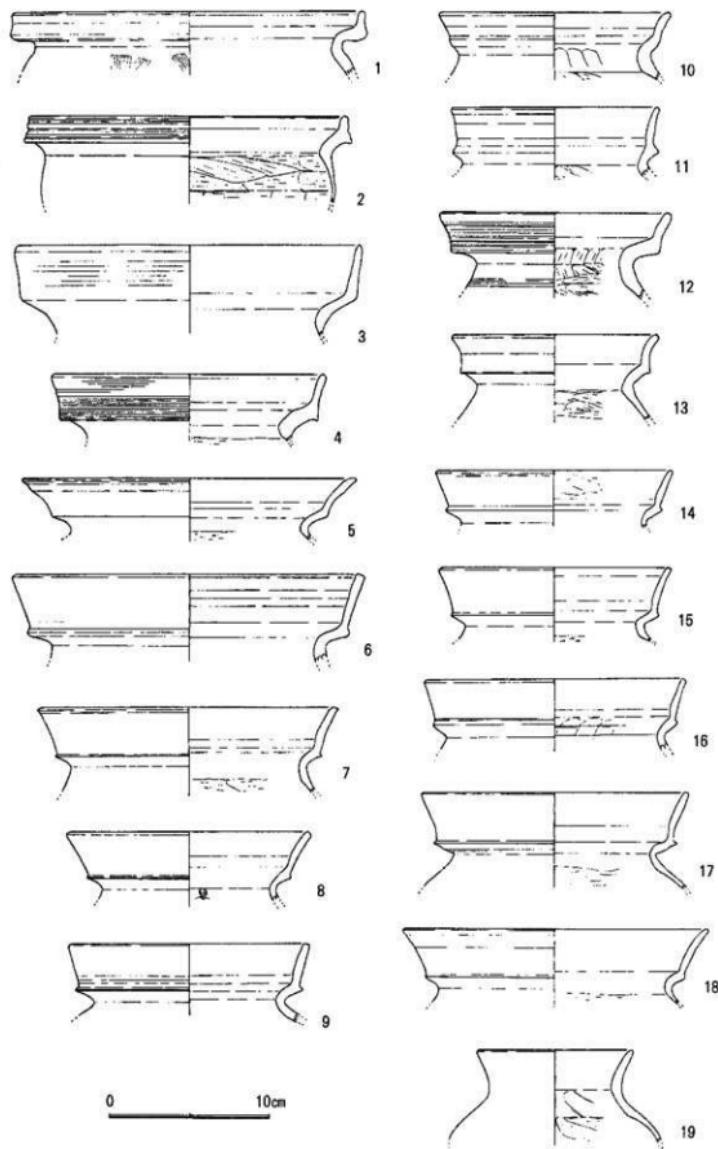
#### S D - 2 出土遺物（第19図）

1～3は複合口縁を呈し、口縁部はやや長く立ち上がり外面にヘラ状工具により擬凹線を施す。復元口径16.4～17.3cmを測り、草田編年2期の甕と考えられる。4は口縁断面を薄く引きのばし端部は尖り気味となっている。復元口径14.3cmを測り、草田編年4期と考えられる。

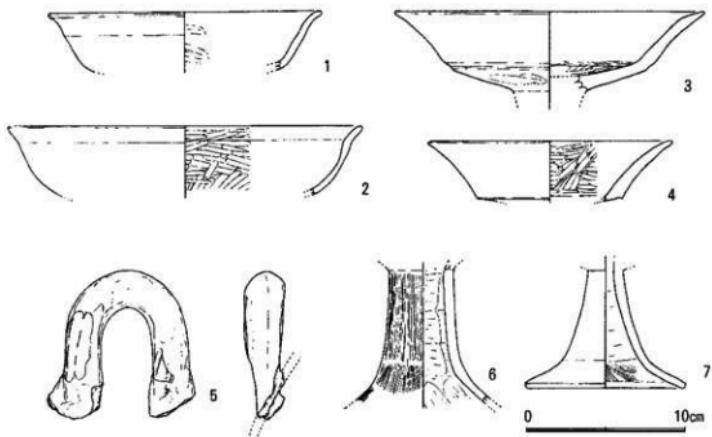
#### 有機物層出土遺物（第20・21図）

第20図1～13は坏身、14～26は坏蓋である。1は若干の焼きひずみがあり、底部はヘラ切り後なでを施すのみである。口径は11.8cmを測る。2～4は底部に回転ヘラ削りを施す。1～4はいずれも内傾した返りをもつが1・2はやや直立気味である。すべて、大谷編年出雲4期のものである。5～9はいずれも底部ヘラ切り後なでを施すのみで口径11.6～12.4cmを測る。返りは内傾するが、7は口縁部の外反が大きい。いずれも大谷編年出雲5期のものである。11～13は返りの立ち上がりが小さく、底部ヘラ切りのちナデを施すのみである。大谷編年出雲6期のものであろう。14～19は、沈線と強い回転ナデにより稜を作り出す。14・15・17は天井部が比較的丸く、ヘラ削りを施す。16は器高が低く扁平で天井部は沈み込む。18は焼成不良でひずみが大きい。14は大谷編年出雲3期か。16～19は出雲4期と思われる。20・21は天井部ヘラ切りの後静止ナデを施すのみである。22は天井部に回転ヘラ削りを施す。23～24はいずれも天井部が欠損している。25～26は天井部にヘラ切りの後静止ナデを施すのみである。20～26はいずれも大谷編年出雲5～6期にかけてのものである。

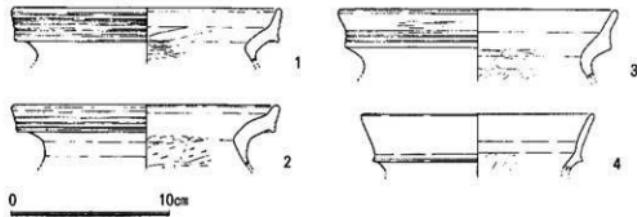
第21図1～3は黒曜石剥片である。2は石鎚の未製品にも見える。4は瓶提口縁部と思われ、端部は外反し下に拡張する。内外面とも回転ナデを施す。大谷編年出雲3期のものである。5は長頭壺で体部に器具痕が見られ、頭部には1条沈線を施す。ほぼ完形で、口縁部の一部が欠損している。復元口径12.0cm・器高27.4cmを測る。大谷編年出雲6期である。6は短頭壺で底部にヘラ削りを施し、ヘラ切りの十字文が見られる。完形で出土し、口径8.5cm・器高13.8cmを測る。口縁外面に強いナデによる段が見える。7は鉢と思われる。口径8.6cm4.2cmを測り口縁部はやや外反する。金属器の模倣か。8は高坏で脚部に透かし状の切れ込みが入る。坏体部には2条の稜を作り出し底部には櫛描刺突紋を施す。大谷編年出雲4期と思われる。9～10は甕である。9は、底部にヘラ削りを施す。脚がついていたものと思われるが欠損しているため形状は不明である。体部に沈線を施し、口縁立ち上がり部に沈線によって稜を作り出す。10は頭部から口縁部にかけてある。頭部に2条の沈線を施す。11～12は、いずれも底部にヘラ削りを施す。12は体部にかけてもヘラ削りが見られ、



第17図 SD 0 3出土遺物実測図(1) (1:3)



第18図 SD 0 3 出土遺物実測図 (2) (1:3)



第19図 SD-2 出土遺物実測図 (1:3)

注口の高さに刺突紋を施す。肩部には沈線による稜線を作り出している。9・11は大谷編年出雲5期、12は出雲4期である。10はその形態から4期であると思われる。13は壺で、口径12.4cm・器高23.1cmを測る。体部は大きく張り出しほぼ球形で外面は器具によるタタキ目を見る事ができる。内面は当て具の跡が見えるが、特に底部では不整形で粗い。体部の中央部に打ち欠き状の丸い欠損が見られるが、人為的なものか、取り上げ時のものか不明である。

註 (1) 烏根県教育委員会『島田池遺跡・鶴賀遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ』1997

(2) 烏根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡第1次調査(橋場手地区 1)』1997

(3) 豊島古則「山陰海岸における完新世海面変化」『地理学評論51』1978

(4) 徳岡隆夫・中村唯史ほか「安来岩屋遺跡および小汐手遺跡で発見された縄文～弥生時代の山陰海岸地形」『山陰地域研究』14』島根大学汽水域研究センター 1998

(5) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の纏年と地城色」『島根考古学会誌11』島根考古学会 1994

#### 〈参考文献〉

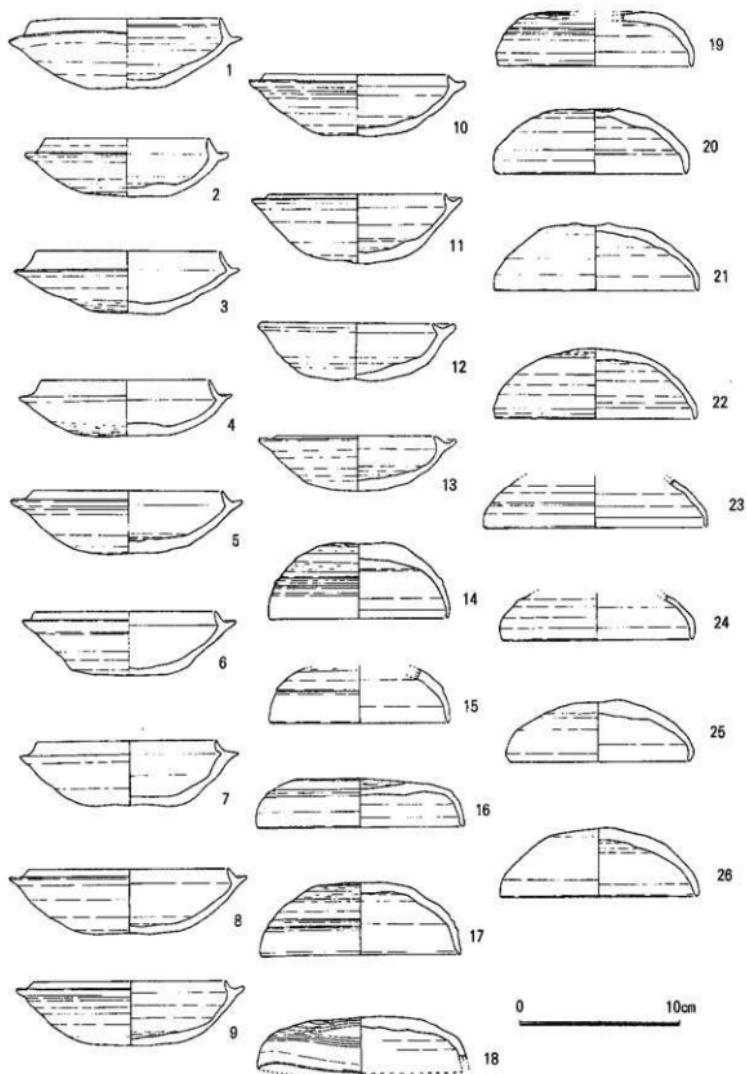
第3章第1節・第2節を執筆するにあたり下記の文献を参考にした。また、島根大学総合理工学部徳岡隆夫教授ならびに中村唯史氏に多くのご教示を頂いた。

・島根大学汽水域研究センター『山陰地域研究 14』1998

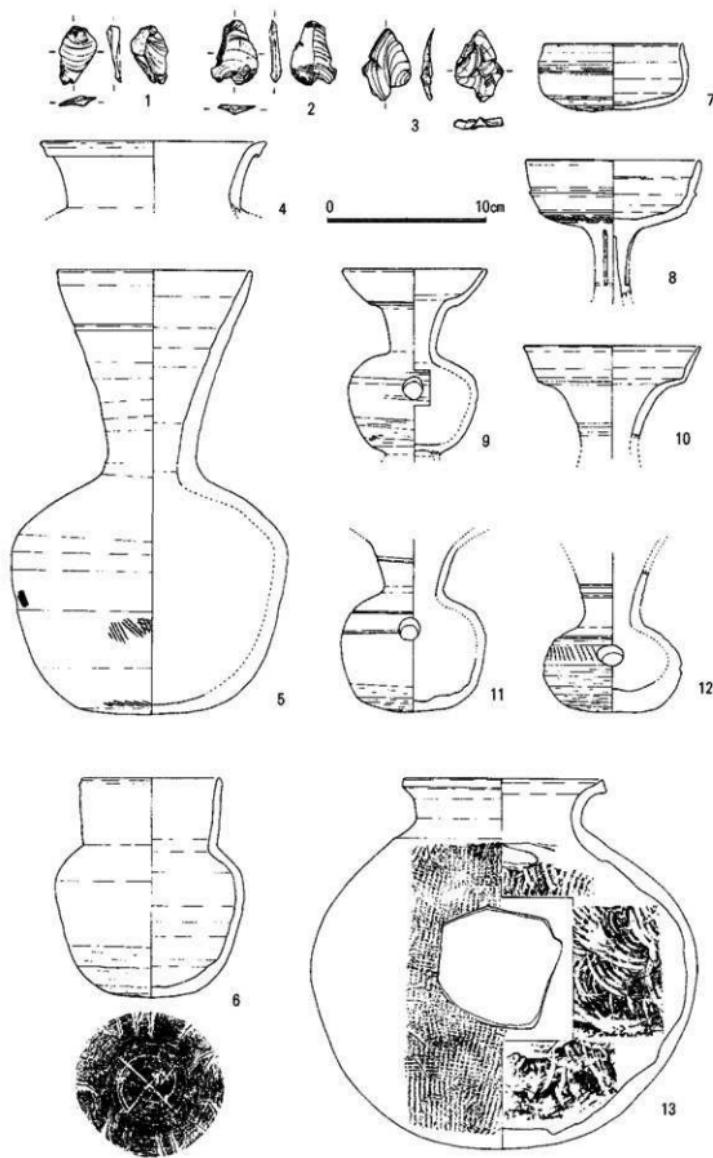
・島根大学汽水域研究センター『I.AGUNA No 3 汽水域研究』1996

・古今書院『新版 地学辞典団』

・東海大出版『新版 地質学講座9 地表環境の地質－地形と土壤』1994



第20図 有機物層出土遺物実測図(1) (1:3)



第21図 有機物層出土遺物実測図 (2) (1:3)

## 第4章 まとめ

今回の岩屋遺跡の発見は、周辺の自然環境・歴史的環境の変遷を考える上で非常に重要な問題を提起したといえる。ここでは今回の調査結果を整理し、若干の検討を加えまとめとしたい。

### ・包含層から出土した土器群について

砂層から出土した土器群は、縄文時代から古墳時代前期にかけてのもので、時代ごとの包含率を挙げると以下のとおりである。

縄文時代0.4%、弥生時代前期0.8%、中期2.5%、後期前葉7.2%、後期中葉10.5%、後期後葉19.8%、後期末52.3%、古墳時代前期6.3%（総数237点中）この包含率は、時期の特定できる個体を抽出し割り出したものである。実際はこれより多くの遺物が検出されているが、すべての遺物の時期別の構成がこの数字と大きくかけ離れているとは考えにくい。有機物層から出土した土器群は、すべて須恵器で古墳時代後期のものがほとんどであるが、律令・奈良期のものも少量含まれている。弥生土器に比べるとわずかで、総数は30点ほどである。

この土器群の中で特に目に付くのが弥生時代後期末の遺物の多さである。全体の約半数がこの時期のものである。また、後期前葉から末までのものを合わせると後期の遺物が9割ほどの量を占める。この時期、岩屋遺跡の立地する谷を巡って大きな変化が現れる。柳・竹ヶ崎遺跡の拠点集落の登場と大型の四隅突出墓である塩津山6・10号墓の築造がそれである。塩津丘陵遺跡群と総称され、集落跡と墳墓の計画的配置があったことが指摘されている。岩屋遺跡で検出された土器の量もこの遺跡の消長と軌を同じくし、時代が下がるほどに土器の量が増え弥生時代後期末を境として、検出される遺物の量が急激に減る。波食台の離水の時期や埋まつた時期も考慮しなければならず、また塩津山編年<sup>③</sup>とのすりあわせを行っていないためはっきりしたことは言えないが、岩屋遺跡の遺物と柳・竹ヶ崎遺跡の間には密接な関係があるのではないかと考えられる。さらに、未確認のため推測の域を出ないが、遺物の流れこんできた場所、つまり北側の丘陵にあるはずの遺構と対岸の柳・竹ヶ崎遺跡との間に何らかの結びつきがあったことが考えられるのではないか。塩津丘陵上だけではなくこの谷全体での遺跡の立地を考えていく必要性を示すものではないかと考える。

### ・縄文海進時の旧汀線について

岩屋遺跡の旧波食台の発見は、中海周辺地域において高海面期が存在したことを示す証拠であり、古環境の変遷を考える上で非常に貴重な資料である。中海周辺で縄文海進の痕跡を示すものは、いくつか発見されているが旧海岸地形という形で確認されたのは今回が初めてである。中海周辺のみならず、日本海沿岸部でも希少な例であり、そういう意味でも大きな意義を持つ発見となった。旧海岸地形は形成時の汀線位置・海面高度を示し、また遺物包含層を伴っていることから埋没した時期など、立地する谷の環境変遷を、時代を追って確認できる。さらに、荒島地区もしくは安来平野の旧地形復元の一助とも得るものである。このことは、自然科学的な面はもとより、次項で述べる周辺の遺跡の立地などにも少なからず影響を及ぼす発見と言うことができ、そうした事からも大きな価値を持つものといえよう。

### ・荒島墳墓群と岩屋遺跡の関係

今回の発掘調査により、弥生時代から古墳時代にかけての時期、中海が荒島丘陵の眼前に迫っていたことが明らかとなった。また、この時期の環境の変遷が荒島墳墓群の墓域の形成や立地に関わってくる可能性も考えられる。

岩屋遺跡の南に向かい合う、柳・竹ヶ崎遺跡の集落、それと同時期の塩津山6・10号墓は中海からの「見え」を意識し計画的に配置されたものであろうと考えられている。<sup>(1)</sup>また、弥生時代後期の墓域（仲仙寺・宮山墳墓群など）が古墳時代前期に中海側の丘陵（大成古墳・造山古墳群など）へと墓域を移していくことに陸地化などの環境の変化が関連する可能性も指摘されている。<sup>(2)</sup>今回の調査では、汀線位置の確認はできたがそれがいつまでのものか、あるいはどのような時期に埋没したかについて明確にはできなかった。遺物などからある程度の時期の特定はできるが、上記の可能性に直接答えを出すものではない。特に、古墳時代前期の谷の状態は状況証拠で判断するしかなく、かなり曖昧な点が多い。しかし、旧地形の復元により新たな視点を投げかけたと言うこともでき、今後こうした成果の積み重ねにより荒島墳墓群の性格についての、さらなる研究成果を期待したい。

註 (1) 島根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅸ』1998

(2) 註(1)の中で丹羽野裕氏は塩津丘陵遺跡群の時期的変遷を明らかにするために土器編年を行っている。

(3) 安来市教育委員会『荒島古墳群発掘調査報告書』1999

# 安来市岩屋遺跡における微化石分析

川崎地質株式会社

## はじめに

本報告は、遺跡周辺の植生変遷、堆積環境変遷などの古環境変遷を推定するために、安来市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した調査報告の概要である。

また、岩屋遺跡は島根県東部の安来市荒島町地内に立地する遺跡である。

## 試料について

発掘調査トレーナー北面のほぼ中央において、安来市教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が試料採取を行った。試料採取地点の柱状図を図1の左側に示した。また、分析を行った試料の採取層準を柱状図右側に試料番号として数字で示した。

## 分析方法および分析結果

### (1) 分析方法

渡辺(1995)に従い花粉分析を、藤原(1976)のグラス・ビーズ法に従いプラント・オバール分析を実施した。顕微鏡観察は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。

### (2) 分析結果

花粉分析結果を図1の花粉ダイアグラムに、プラント・オバール分析結果を図2のプラント・オバールダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基數にした百分率を各々の木本花粉、草花粉について算出し、スペクトルで表した。プラント・オバール分ダイアグラムでは、1gあたりの含有数量としてスペクトルで示した。

## 考 察

### (1) 花粉分帶

花粉分析結果をもとに、花粉分帶を行った。以下では、花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。また試料Noも下位から上位に向かって記した。

#### IV 帯 (試料No10~6)

マツ属(複雑管束亞属)、スギ属、アカガシ亞属、コナラ亞属が同程度出現し、特に卓越する種類はない。イネ科(40ミクロン以上)の出現傾向からb亜帯(試料No.10~7)、a亜帯(試料No.6)に細分した。

#### III 帯 (試料No5)

マツ属(複雑管束亞属)が卓越し、スギ属を伴う。

#### II 帯 (試料No.4~2)

マツ属(複雑管束亞属)が卓越し、コナラ亞属を伴う。

## I 帯（試料Na1）

マツ属（複雑管束亞属）が卓越し、特に高率を示す種類はない。

### (2) 稲作について

試料Na6より上位でイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で検出された。さらに同試料からイネのプラント・オパールが1500個／g検出される。また、IV带a亜帶はIV層下部にあたり、下位のV層で認められたイネ科の地下茎なども見られなくなる。以上のことから試料Na6標準（IV層）以浅で継続的に稲作が行われていた可能性が高い。ただし、前述のようにイネ科（40ミクロン以上）はすべてが栽培のイネに対比されるものではなく、イネプラント・オパールの検出量も通常の水田跡から検出される量より少ないなど、稲作に否定的な見方もできる。

### (3) 古環境変遷

ここでは、花粉帯毎に、花粉分析結果、プラント・オパール分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

また、IV带b亜帶に相当するV層は、出土遺物から古墳時代後期に堆積したと考えられている。したがって、IV带b亜帶は古墳時代後期の植生を表していると考えられる。

### IV带b亜帶期（古墳時代後期）

イネ科（40ミクロン未満）の出現率が高く、イネ科（40ミクロン以上）の出現率が低い。また現地の観察では、イネ科の地下茎が地層中に多量に含まれていた。以上のことから、遺跡内は湿原（アシ原）のような状態であったと考えられる。

遺跡周辺の山々には人手が入り、アカマツやコナラ類の優占する「里山」となっていたと考えられる。しかしカシ類やシイ類を要素とする照葉樹林も一部では残り、谷沿いにはスギも林を形成していたと考えられる。また、植生の垂直分布から考えてブナ属花粉は中国山地の山々から飛来したと考えられる。

### VI带a亜帶期

前述のように遺跡内では稲作（おそらく水田耕作）が行われるようになったと考えられる。

遺跡周辺の山々はb亜帶期と同様にアカマツやコナラ類の優占する「里山」となっており、カシ類やシイ類を要素とする照葉樹林や谷沿いのスギ林も残存していたと考えられる。

### III带期

遺跡周辺で広く水田耕作が行われ、ソバの栽培も行われていたと考えられる。アブラナ科花粉が高率を示しナタネが栽培された可能性も指摘できるが、花粉形態学上アブラナ科の細分は不可能なことから断定できない。また周辺の山々はアカマツ林へと移り変わっていたと考えられる。開発が進み、カシ類を要素とする照葉樹林が伐採され、裸地を経てアカマツ林へと移り変わっていったと考えられる。

### II带期

遺跡周辺の様子に、前時期から大きな変化は無かったと考えられる。周辺の山々は「里山」となり、前時期まで残存していた谷筋のスギ林も伐採され、跡地には水田が造られた可能性がある。

### I带期

前時期同様に、遺跡周辺には現在認められるような水田が広がっていたと考えられる。また、

「里山」ではコナラ類より商品価値の高いアカマツが残され、育てられていたと考えられる。

## まとめ

岩屋遺跡において花粉分析、プラント・オパール分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集を I ~ IV 帯の 4 花粉帯に分帶できた。さらに IV 帯を a、b 亜帯に細分できた。
- (2) 各分析結果を総合し、古墳時代後期以降の古環境変遷の一部が明らかになった。これらのうち、特筆すべき点は以下のものである。
  - ① IV 帯 a 亜帯期以降、水田耕作が行われたと考えられる。
  - ② III 帯期、II 帯期初期にはソバの栽培も行われていたと考えられる。
- (3) 今後、放射性炭素による年代測定などを併用すれば、詳細な植生変遷の推定が可能である。

## 引用文献

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の硅酸体標本と定量分析法 -、考古学と自然科学、9、15-29。

渡辺正巳 (1995) 花粉分析法、考古資料分析法、84, 85. ニュー・サイエンス社

## 図表一覧

図 1 花粉ダイアグラム

図 2 プラント・オパールダイアグラム

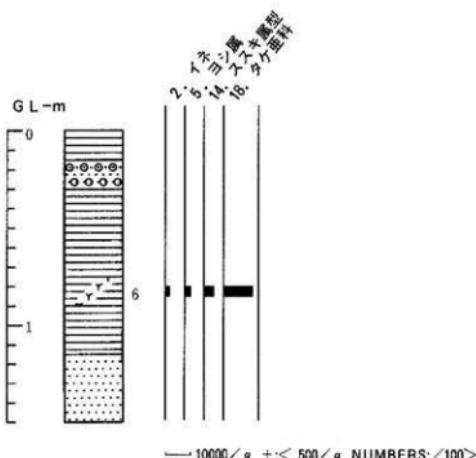


図 2

岩屋遺跡

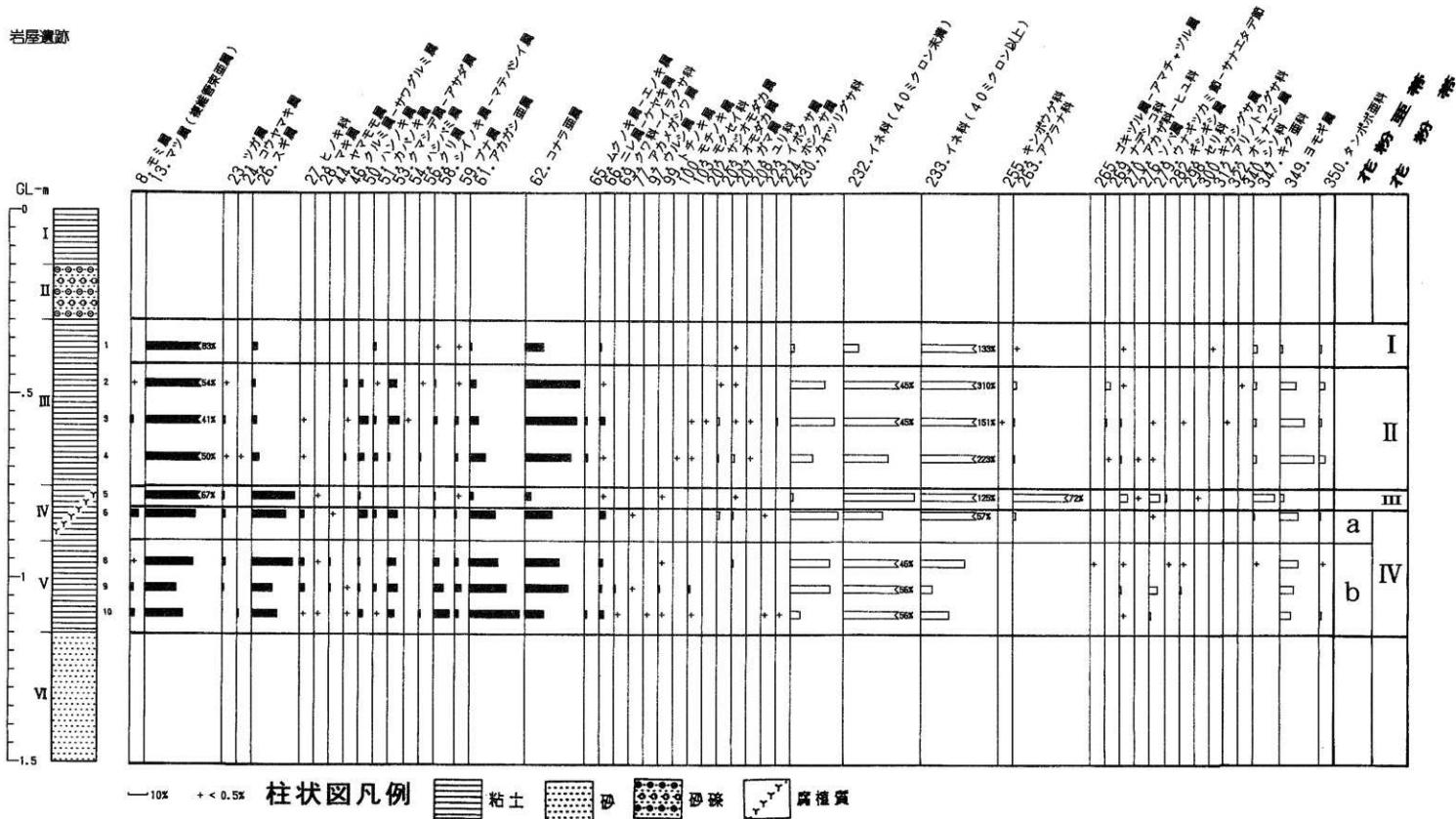
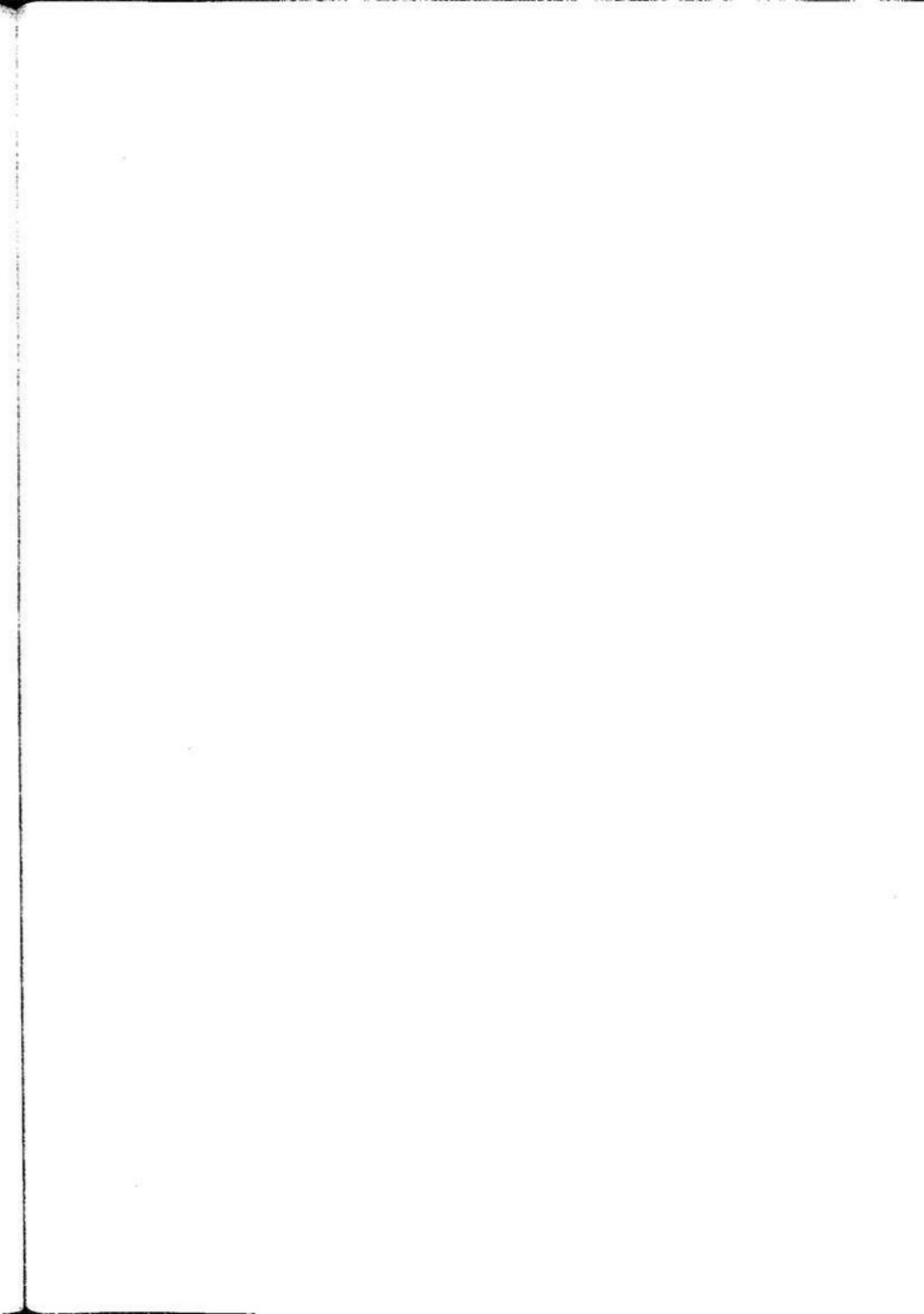
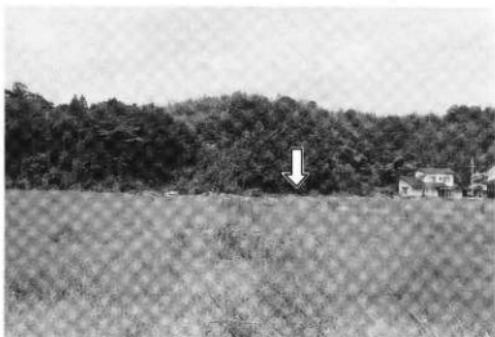


图 1

# 図版





南側から調査区を望む（矢印が調査区）



調査区から見た塩津丘陵



調査区全景（東から）



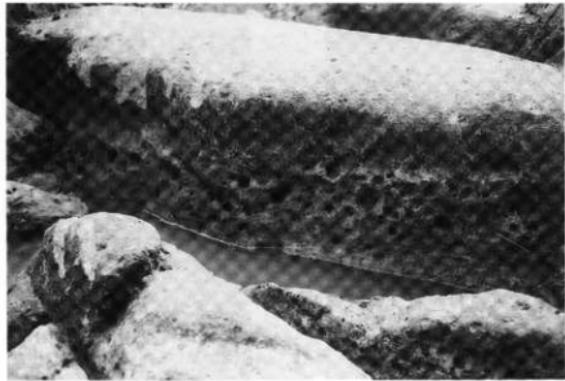
調査区全景（西から）



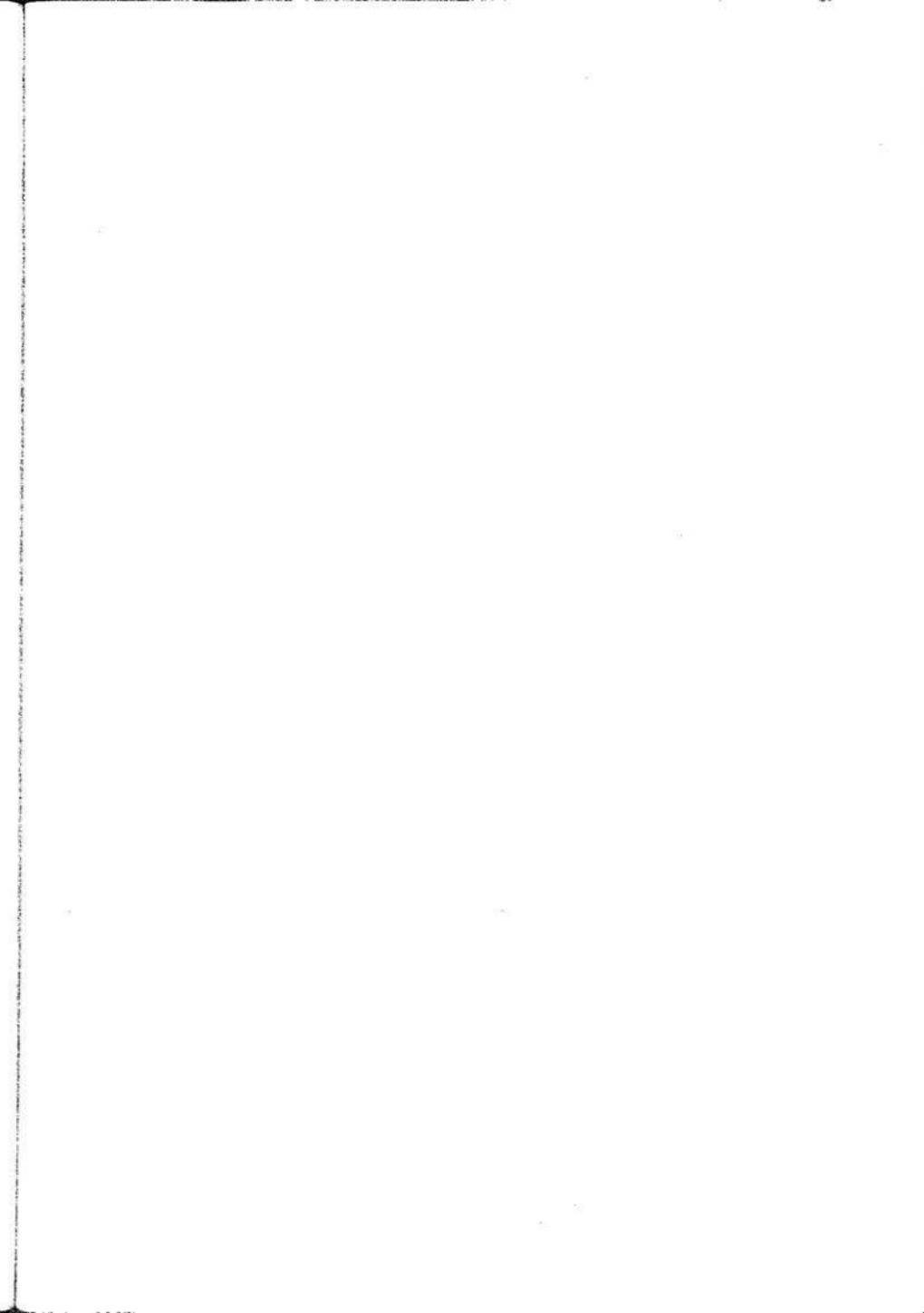
S D 0 3～0 4 付近



S D 0 2 完掘状況



溝壁面の穿孔貝痕跡



## 報告書抄録

ふりがな	いわやいせき				
書名	岩屋遺跡				
副書名	柳地区住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書				
卷次					
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第30集				
編集者名	大塚 充				
編集機関	安来市教育委員会				
所在地	〒692-0011 島根県安来市安来町874-20 TEL 0854-22-2149				
発行年月日	西暦2000年3月31日				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		調査期間
岩屋遺跡	島根県安来市 荒鳥町字柳	32206		35度 25分 42秒	133度 12分 40秒 ~ 19971017
調査面積	潜戸谷遺跡	200m <sup>2</sup>	調査原因	住宅団地造成事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩屋遺跡	散布地 海食台	縄文～ 古墳時代	溝状遺構	縄文土器・弥生 土器・土師器・ 須恵器	縄文海進時の海食台 跡が確認された。 保存状態が良好な土 器群を検出した。

### 岩屋遺跡

安来市埋蔵文化財調査報告書第30集

柳地区住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2000年3月発行

発行 安来市教育委員会 印刷 (南) 岩田印刷